会報No. 453

子どもの本 研究会

【私の一冊】

『犯罪心理学者が教える子どもを呪う言葉・救う言葉』
出口保行 著 （SB新書）

大塲 玲子

テレビの画面で著者をご覧になった方も多いかもしれない。その軽妙な語り口に思わず「コメンテーター？」と思ってしまうが、れっきとした犯罪学者であり、さらに言えば、全国の刑務所や少年鑑別所で犯罪者・非行少年1万人以上の鑑別を行った心理分析のエキスパートである。

犯罪や非行といえば、何やら、自分とは関係ない遠い別世界のことで、犯罪者や非行少年は、ふだんの自分とは交わることのない異質で特殊な人たちのように考えてはいないだろうか。しかし、彼らの生活歴や家族、親との関係等、膨大で緻密な分析から導かれたことは、私たちの生活、とりわけ親子の関係性に驚くほど多くの示唆を与えてくれる。

最近は、子どもは親を選べない「親ガチャ」という言葉が世の中を闊歩していて、思い通りにうまくいかない原因を、ハズレの親（学歴や経済力や知的レベルが低い家庭環境）に求めて「親ガチャにはずれた」などと盛んに言い立てるが、子どもが不幸になるのは必ずしもハズレの親のもとに育ったからばかりではない。

子育てを放棄しているわけでも虐待をしているわけでもない、世間一般的にハズレでなくとも、「よかれと思って」子どもに誤った声かけをしているかもしれない。よほどの例外を除けば子どもの幸せを願わない親はいないわけで、正しいと信じて、あまり疑念も感じることなく様々な声かけを行っているのではないか。いつも「みんなと仲良く」と言っていないか、「頑張りなさい」と言っていないか？「みんなと仲良く」が単なるきれいごとの押し付けだったり、「頑張りなさい」がただ漠然と頑張りを強要し続けるものであったりとすれば、子どもの耳とアタマとココロの中には何が醸成されていくのか。親への信頼や自らへの肯定感ではあるまい。「親のよかれ」が「子どもの呪い」になっているかもしれないのだ。

13万部のベストセラーになったこの本は、8月に、事例と解説がマンガとなってリメイクされた。子育てに悩む方はもとより、子育てに自信アリの方にこそ、是非、手に取っていただきたい一冊である。

（一般社団法人日本更生保護女性連盟　常務理事）

2024年 9月25日（水）特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会　発行

https://www.kodomonohon. org　E-mail: info@kodomonohon.org

◆3回連続公開講座 報告

「日本の昔ばなしを読む」第2回
熊本の話「はなたれこぞうさま」

講 師 森正人さん（熊本大学名誉教授、尚絅大学・尚絅大学短期大学部名誉教授）

◇日時 7月17日（水）10時～11時35分
◇場所 くまもと県民交流館パレア会議室9
◇参加者 20人（オンライン2人含む）

○朗読「ハナタレ小僧様」（『肥後の民話』荒木精之編、未来社より）
朗読：古上美智代

Ⅰ 再話の原典

「ハナタレ小僧様」の再話の原典は、嶺香生による「ハナタレ小僧様」（『旅と伝説』第2年第7号、昭和4年7月）。嶺香生はペンネームで、玉名郡南関町出身の多田隈正巳であることは、柳田國男の『桃太郎の誕生』（昭和8年）に知られる。後年、能田太郎の「玉名郡昔話（四）第二十九話 鼻たれ小僧」（『昔話研究』第1巻第5号、昭和10年9月）に、採集に関する事情として、この話は、多田隈が玉名郡内の旧春富村（現和水町）出身の母親から聞いたもので、南関町あたりには知る人はいなかったと記す。阿蘇郡あるいは玉名郡内に伝わっていた話であったようだ。

Ⅱ 話型の名称と位置づけ

柳田國男監修『日本昔話名彙』には、「財宝発見」の中の「竜宮童子（心得童子、如意童子）」として登録。玉名郡の採集例を示し、青森、岩手、新潟、鹿児島各県に採集例があることを示す。

関敬吾の『日本昔話大成』6では、「異郷」の中の二三三番「竜宮童子」として新潟県見附市の採集話を例示。近畿、関東地方の採集例は載っていない。

『日本昔話通観 長崎 熊本 宮崎』49では、「竜宮のみやげ―はなたれ小僧」として長谷部保正の『阿蘇のむかし話』（青潮社）から例示。

Ⅲ モチーフ構成に沿って

話型をさらに分けた単位がモチーフ。『昔話通観』のモチーフ構成を参照してまとめると、①薪売りの爺が売れ残った薪を橋の上から川に投げ込み、竜神に捧げる、②川の中から美女が現れ、竜神からの礼としてはなたれ小僧を授かる、③爺は小僧様を神棚の横にすえ毎日えびなますを供えると、小僧ははなをかむような音をさせて金銭、米、立派な家を出す、④爺が小僧様への供えを煩わしく思い、竜宮にお帰りを願うや、小僧様ははなを吸う音をたてて、財物はすべて消え、もとのあばら家に戻る、となる。

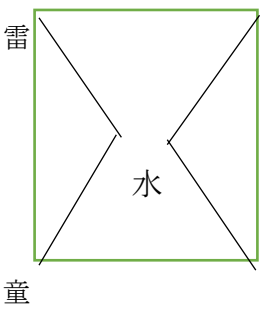
橋の上に注目。橋は境界で、この世ならぬ存在や共同体の外部の存在と遭遇する場所。「はなたれこぞう」を授かるのは橋の上だからこそとなる。昔話の「味噌買い橋」や『屋代本平家物語』「剣巻」の一条戻橋など、橋を舞台とする不思議な話は多い。

竜宮は、海や池や湖の底、川の淵にある。竜神がいて宮殿がある。鎌倉時代の「華厳縁起絵巻」では、竜王は風格ある姿に、竜女は美しくあでやかに描かれている。

「龍」は水神で、水の不思議な力を体現する神である。「雷」は雷神で「童」の姿をしている。

「剣」は〈蛇行剣〉のように蛇の姿と似通っており、水の力、霊力を表す。「龍蛇と剣と童子と雷神とは相互に他を象徴する関係にあり、その中核には水の霊力がある。水が不思議な働きを負い持ち、人間界で霊妙な働きを示す時、それは龍蛇、剣、童子の姿で出現する」（森正人『龍蛇と菩薩』）。よって、「はなたれこぞう」は、水の霊力を象徴する童子と考えていいのではない

か。水の霊力による相互象徴関係を図に示すと次のようになる。



竜宮は無尽蔵の富がある世界と考えられている。『太平記』の中に、竜王の宿敵を倒した武将が、尽きることのない巻絹や俵を礼にもらう話がある。

Ⅳ 柳田國男の昔話研究に占める本昔話の位置

柳田は昭和5年4月『旅と伝説』に「海神小童」を発表(『定本柳田國男集　第八巻』に収録)。非凡の英雄の最初の出現は、小動物、愚かで怠け者、貧しく醜い姿と指摘。また、「はなたれこぞう」を英雄出現の姿で竜神の使者としているが、竜神の化身と考えても良い。神に愛される者だけが、異常な童児または希有な珍宝を得るという部分が特に大切な骨子だと説く。これは桃太郎の昔話に通じる。桃太郎の爺も、「はなたれこぞう」の爺も、神に愛される者であった。信仰が揺らぎ、聞き手の要求が改まり、作り変えられていき、現在の昔話はあると論じている。

「桃太郎の誕生」という昭和5年1月の講演の記録(『桃太郎の誕生』に収録)に、日本の小さ子説話は、英雄が小動物の姿で出現し、奇怪な妻訪いの成功を中心としているが、それは人間と神の結婚である神人通婚の信じられた時代に始まっている証拠であると、つまり昔話は神話にさかのぼりうると論じる。「はなたれこぞう」は、柳田の昔話研究に大きな役割を果たしたと思う。桃太郎の昔話成立の理論の証明に有効な資料だった。「竜宮童子」という命名は、自説に対する補強の意図と期待の表れで、高貴な存在として呼び換えて、はなたれこぞうは本来聖なる存在だと語ろうとしている。時代が下ると変化してしまうというのである。

Ⅴ 子どもの本としてどういうふうに読むのか

聞き手の要求によって変化した昔話を読むとき、どう読むのか、あるいは読めるのか。

手がかりとして①売れ残りの薪が捧げものであるということ、②爺が手に入れ、失った財宝と童子のハナ(洟)との関係、③勤勉で敬虔だったはずの爺が変化してしまうことを挙げておく。

○質疑応答・感想など

■語っていて子どもにも大人にも喜んでもらえる話。

■真面目にやっているときはいいことが起こるが、それにあぐらをかいてしまうとよかったことは消えてしまう。仏教説話のような感じもするが、話はいつ頃成立したのか？

〈森〉文献資料はなく成立がいつ頃かは分かりにくい。昭和の初めには語られていたが、どこまで遡れるのかは分からない。

竜宮の竜は、元はインドの「ナーガ」(蛇を指す)であったが、中国に持ち込まれて仏典で「竜」と翻訳され中国の竜と結びつく。それが日本に来ると、水の神の信仰と結びつき性格がさらに複雑に変わってくる。少なくとも竜宮は仏教のもので、その観念が「はなたれこぞうさま」まで引き継がれているとは言える。

■海の中から神様が出るロシアの昔話「金の魚」に似ていると思った。

■「金の魚」や「竜宮童子」は「漁師とその妻」(ＡＴ５５５／ＡＴＵ５５５)の話型に分類される。グリム童話「漁師とその妻の話」(ＫＨＭ19)では妻の願いが節度を超えると最後にすべて失い、もとのあばら屋に戻る。罰せられる類話も

ある。

〈森〉度を過ぎた願いによって罰せられるという語り方は、「ハナタレ小僧様」とは少し違う。もう願うことがないからお帰りくださいと言うのは、竜神に対する敬虔な態度がなくなったとは言えるが、度を過ぎた要求とは言えない。仏教説話という話が出たが、そこに仏教の教えを感ずる。最初の語り手が仏教界に近かったのではないか。

『今昔物語集』の話に、竜王が娘を助けた男に、持つと全ての望みが叶う如意宝珠をあげたいが、これは人間が持ち続けることはできないと言う場面がある。では、この「はなたれこぞう」は如意宝珠だったのか。お坊さんが関わっていたとしてどうなのか。爺が分を超えた望みを抱いたのかということも関わって、「はなたれこぞう」は何だったのか考える手がかりになるかなと思っていた。

■薪はお爺さんにとって生きるための大切なもの。明日売ってもいいのに竜神様を念じながら川に投げた。でも、そのお爺さんが変わっていくところに人間の性を感じる。

〈森〉心を込めて投げ入れたという語り方は大事な要素。貧しい者にしかできない捧げものを竜神が受け入れたのだと思う。

■ハナ（洟）という排泄物が気になる。

〈森〉子どもは喜ぶが、大人はなぜそれが財宝なのだと引っかかる。そこにも仏教者が関わっているような気がする。

（報告　木村一惠）

＊＊＊

森先生の解説でしばしば登場する柳田国男の業績や人物像について、民俗学、考古学分野の取材が長い毎日新聞客員編集委員・伊藤和史氏に寄稿してもらった。

◆今を生かす伝承の力

柳田国男（１８７５～１９６２）は民俗学者で、日本民俗学の創始者である。民俗学は神話や昔話、祭りや信仰、慣習や年中行事、方言や地名などが対象の学問として知られるが、そもそもなぜこうした研究が必要なのかという問題が興味深い。ここに柳田の経歴が関係する。

柳田国男は明治の初めに兵庫県で生まれ、高度成長期の入り口で亡くなった。日清、日露、アジア太平洋戦争を生き抜いた人で、この激動の近代日本が柳田民俗学の背景にある。

東京帝国大学法学部（農政学専攻）卒業後、当時の農商務省入省。後に貴族院書記官長（今の参議院事務総長）や朝日新聞論説委員を務め、国際連盟委任統治委員としてジュネーブに赴任もした。大変なエリートだが、単なる切れ者官僚とは違う。青春期は抒情詩や短歌をつくる文学青年だった。加えて、幼少時、神隠しのようなミステリアスな体験を幾度も持ったことを回顧録等で明かしている。リアルとロマンの資質が稀有なレベルで融合した人物といえる。

農政官僚として全国の農山村の旅を重ね、中農の育成や小作農の組合設立などの革新的な政策を目指した。しかし、実現せず、失望した。こうした体験が民俗学の道を選ばせる。

実は柳田は学問の目的を明言している。「我々の学問は人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識」であり、もっと具体的に「何ゆえに農民は貧なりや」という眼前の根本問題に解答するには過去を明らかにする必要がある、とも述べた（『郷土生活の研究法』）。

そのための方法として徹底的に重視したのが伝承である。歴史の素材はまずは文字資料と考えられがちだが、勝者に都合よく書かれた場合が往々にしてある。それでは普通の人々の歴史がわからない。そこで支配層、知識人層の情報

に任せず、文字で残らなかった伝承を集め、そこに現れた普通の人々の生活と意識を探ったのである。かつての暮らしには、その時代がもつ価値観で見た独自の意味があった。その地点に立って改めて現在を見直し、眼前の問題への答えを見いだそうとしたのである。

こうした志と、元文学志望の鋭敏な感性が珠玉の日本文化論を生んだ。膨大な情報（方言など全国から集まった資料と書物の知識）が比較、分析されるにつれ、読者は思いもよらぬ風景を見せられる。昔の人の心に分け入った気になる。そして、今の社会を思ったりもする。我々は柳田の術中にはまったのである。

ただし、著述の先に便利な理論や法則が示されると期待しても裏切られる。柳田の著作は、何か結論を知って事足れりとする類のものとは異質である。もちろん、最晩年の問題作「海上の道」が日本文化北進論を唱えたように、作品ごとに強烈な主張がある。それは大切だが、本当の解答はむしろ、一行一行の中に、読書の時間の中にある。それは読む人によって全く違うこともある。柳田の膨大な著作は、読者一人ひとりにとっての無限の源泉なのだと思う。

◇報告　公開講座「田口祐子さんをお招きして　おはなし会と小道具製作」

講　師　田口祐子さん（おはなしの会クレヨン代表　福岡県大牟田市在住　絵本の読み聞かせやおはなし会、講演、講座等子どもの読書活動を支援）

製作指導　田口浩一さん（大牟田レクリエーション協会所属）

◇日　時　8月4日(日)

おはなし会　10時～11時30分

小道具製作　13時30分～15時

◇会　場　熊本市民会館シアーズホーム夢ホール第3・4会議室

◇参加者　午前20名　午後18名

○おはなし会プログラム

①ありこのおつかい（語り）

『ありこのおつかい』（いしいももこ作・なかがわそうや絵、福音館書店）

②ヤドカリのうみのいえ

（小道具を使ったおはなし）

③あふりかのたいこ（語り）

『あふりかのたいこ』（瀬田貞二作・寺島竜一画、福音館書店より抜粋）

④魔女のシチュー（語り）

『明かりが消えたそのあとで 20の怖いお話』（マーガレット・リード・マクドナルド著・佐藤涼子訳、編書房より）

⑤鳥（語り）安房直子作

「ありこのおつかい」は、田口祐子さんが入れ子式の小道具を使いながらおはなしを語られていきました。アリがカマキリに飲み込まれ、そのカマキリがムクドリにのみこまれ、ムクドリがネコに、そしてネコがクマの子に飲み込まれてしまうのですが、それぞれが発する悪口の声まで飲み込まれていくという設定で、登場する動物が描かれた入れ子式の箱がだんだん大きくなっていきます。そして、今度はそれらの動物が順々に飛び出る場面に変わると、箱からも順々にネコ、ムクドリ、カマキリ、アリが悪口の言葉と一緒に出てくるのです。おはなし会で、子どもたちが入れ子式の小道具で進んでいくストーリーをワクワクしながら聞く様子が目に浮かぶようでした。

夏本番にふさわしい「ヤドカリのうみのいえ」のおはなしでは、祐子さんの右手と左手が軍手とタオルで作られたヤドカリになり、2匹のヤ

ドカリが次々と海の家の料理を作ってくれます。シフォン布やフェルト、毛糸等を使ってつくったかき氷、ラーメン、カレーライス。そして、すべてのトッピングが子どもたちの大好きなソフトクリームなのです。味の想像はつきませんが…。カラータオルをくるくる巻いただけなのに、なんともおいしそうなソフトクリーム。参加者の皆さんも一様にびっくりされていました(午後の製作時に、作り方を習っておみやげとして持ち帰りました)

「あふりかのたいこ」の語りは、出版されて50年以上経過している絵本からの抜粋ですが、いつの時代、どこの国も共通に、人間も動物も同じ自然に生かされている事に気づかされ、かつ命の尊さをしっかりと伝えてくれるおはなしでした。たいこを使った伝達法は、情報機器が溢れ返る現代の子どもたちが想像するのに難しいかもしれませんが、主人公のタンボ少年が打ち鳴らすたいこの音は、現代の子どもたちにきっと言葉のように伝わるだろうとも思いました。

「魔女のシチュー」の語りは、題名だけでも子どもたちの興味をひくでしょうが、あたかも魔女が現代の身近な場所に存在しているかのような期待を抱かせる祐子さんの語りかけから始まり、おはなしにひきこまれます。現実と空想を、なんなくつなげてお話に引き込んでいく祐子さんの語りかけに感動しました。プロジェクターやドライアイスをしのばせた大きな鍋の演出効果も楽しくて、その不気味な雰囲気が、子どもたちの怖いけどのぞきたいという気持ちを高めるのではないでしょうか。面白くてちょっと怖いおはなしも、やってみたくなりました。

最後は、長いおはなし「鳥」。ミステリアスで展開がおもしろいおはなしでした。少女が聞いてしまった〝秘密〟を、腕の良い耳のお医者さんに自分の耳からどうにかして取り出してほしいと頼むのです。それができないと大好きな少年が鳥の姿に戻ってしまう…。その訳を聞くお医者さんが入り込む幻想的な場面。聞き手の私たちも、どうなるの？ どうするの？ と祐子さんの語りに夢中になってしまいました。お医者さんが〝秘密〟を耳からとりだすことができないまま少女は悲しげに去ってしまいますが、最後の最後に少女が座っていた椅子に残っていた鳥の羽根が、謎を解いてくれます。愛おしむことの切なさも感じるミステリアスで素敵な物語でした。祐子さんの優しい語り口に誘われ、午前の部ではたっぷりお話を楽しませていただきました。

午後の部は、田口浩一さんのご指導で「万年カレンダー製作」に取り組みました。

事前に浩一さんが製作されたいろいろなモデルのカレンダーを展示されたので、参加者は実際に触れたり材料を尋ねたりしてそれぞれ思い思いの万年カレンダー製作に臨みました。浩一さんが、材料はもちろん工作用具等もたくさん準備されていたので、皆さん存分に製作に集中することができました。カレンダーのほかに午前のお話の時間に登場した、タオルと紙カップを使ったソフトクリーム製作もしました。さらには、色水がはいったペットボトルの中で醤油入れの魚が浮いたり沈んだりする不思議なアクアリウムの紹介もありました。

皆さん童心に返って製作に熱中し、いつしか子ども時代の夏休みの工作の思い出話にもなり、楽しい時間を共有しました。未完成のカレンダーやペットボトルアクアリウムが、「夏休みの宿題」となった方もちらほらおられました。

（報告　辻　由美）

◇活動報告
おはなしボランティア「びわの木」

夏休みの前半（7月29日）と後半（8月28日）の2回、熊本市の西原小学校児童育成クラブへおはなし会に行ってきました。育成クラブには、1年生から4年生の100人を超える子ども達が在籍。今回のおはなし会には各回60人ほどの子ども達が参加してくれました。

会場に入った瞬間、狭い教室の中は、暑さと大人数の子ども達の溢れんばかりのパワーで、うまくおはなしの世界に入っていけるのか少々心配しました。しかし、そこはさすが「おはなしの持つ力」、昔話や絵本の世界にすんなりと入っていくことができ、よく反応してくれました。

おはなし会の始まりの「ろうそくのうた」では、照れくささからか動きや声がなかった子ども達も、慣れてくると「カッパ」や「八べいさんと十べいさん」の手遊びもすぐに覚えて楽しんでやってくれました。変わり絵の「花火」では歓声が上がりました。子ども達からは作り方を教えてほしいとリクエストもありました。

2回目の訪問では、うれしいことに前回のおはなしを覚えていて、声をかけてくる子もいました。絵本『まどのむこうのくだものなあに？』、言葉遊び「へんなひとかぞえうた」「だじゃれづくし」など、参加型のおはなしに子ども達は身を乗り出し、にぎやかな声と笑顔で大いに盛り上がりました。

帰り際にニコッとして抱きつきにきた女の子がいました。おはなしに満足してくれたんだなとうれしくなりました。

（報告　古上美智代）

◇おはなしボランティア「びわの木」
研修会報告

日　時　6月19日（水）13時30分～14時40分
会　場　くまもと県民交流館パレア　音楽室
参加者　8人

3人の新メンバーを迎え今年度初めての研修会を開催。おはなし会で絵本や詩、わらべうたなどをどのように読むか、演じるかを実演しながら学びました。

「ろうそくのうた」でお話の世界へ、そして始まりはわらべうたと人形を使ったお話。新メンバー持参の絵本『わたしのワンピース』（にしまきかやこ作、こぐま社）、『いぬ』（ジョン・バーニンガム作、谷川俊太郎訳、冨山房）、『あやちゃんのうまれたひ』（浜田桂子作、福音館書店）の間に、詩や小道具を使ったお話をはさんで、プログラムの組み立て方も学びながら進めました。

4月の開講式で実施したミニ講座「おはなし会をはじめる前に」を振り返りながら、「わが子に読むのと、集団の子ども達に読むのは違う。絵本の持ち方にとどまらず、お話を届けることを意識し、全員に聞こえる声の大きさで読む」「人形や小道具などは、おはなし会では大切なアイテム。小道具製作の実習も考えたい」などの意見が出ました。

（報告　倉岡寿雅子）

「びわの木」メンバーを募集します

研究会のおはなしボランティア「びわの木」は、県・市立図書館や学校、病院などさまざまな場所を訪ね、子どもたちとお話を楽しんでいます。一緒に活動しませんか。最初は見学だけでも結構です。研修会も実施しています。興味のある方は、知り合いの会員にお声掛けいただくか、研究会メール（info@kodomonohon.org）にご連絡ください。

10月、11月の活動の案内

○講座　紙芝居を楽しもう

日時　10月16日（水）10時～12時

場所　熊本市立図書館

○講座　児童書『虫のお知らせ』を読む

日時　11月20日（水）10時～12時

場所　熊本市立図書館

＊講座申込アドレス　kouza@kodomonohon.org

○おはなしボランティア「びわの木」活動

・10月11日（金）10時～11時

10月25日（金）13時～14時15分

11月8日（金）10時～11時

11月22日（金）13時～14時15分

江津湖療育医療センター分教室

・10月19日（土）11時～11時半

熊本市立図書館（小学生）

・10月26日（土）14時～14時半

熊本県立図書館（幼児・小学生）

・10月28日（月）13時～13時半

熊本大学教育学部附属支援学校（中等部）

・11月13日（水）13時半～14時

熊本県立熊本支援学校

○研究会活動検討会（オンライン）

日時　10月6日（日）10時～12時

＊申込アドレス　zoom@kodomonohon.org

○「びわの木文庫」貸し出し予定日

10月19日(土)、11月9日(土)

お越しになるときは事前にご連絡願います。

本はともだち！

今回「私の一冊」への寄稿をお願いした大場玲子さんは、熊本高校の一つ後輩です。法務省で40年間更生保護行政に携わり、この春より日本更生保護女性連盟の事務局長を務められています。高校時代から面識があったことと、国家公務員同士だったこともあり、東京の同窓会で会うとよく近況交換をしていました。7月に開催された同窓会（東京江原会）でお会いしたことをきっかけに寄稿をお願いしたところ、二つ返事で引き受けていただきました。その後新しい仕事についてお話を聞いたところ、連盟の構成員である更生保護女性会の方々は、こども食堂を始めとする子育て支援活動、地域との連携・協働活動もされているとのこと。図らずも研究会の活動と親和性が高い活動をされている組織の事務局長に寄稿をお願いすることとなった次第です。今回のご寄稿をきっかけに、熊本の更生保護女性会の方々との連携活動を始めることが出来ればと思っています。

西原小学校児童育成クラブ（学童）でのおはなし会に毎回60人ほどが参加し、こども達も随分楽しんでくれていたとお聞きし、本当に嬉しくなりました。小学校の学童クラブが子ども達に本を紹介する良い場ではと思っていたのですが、なかなか接点作りをすることができず、実現していませんでした。それが、絵本、紙芝居の貸し出しを通して学童の先生方との接点ができ、今回のおはなし会に繋がりました。このようなネットワークづくりを一つ一つ地道に積み重ねていくことが重要であることを改めて認識した次第です。同様のことを他の小学校の学童クラブとも出来ればと思い、熊本市教育委員会経由で近隣の学童クラブの方々にもお声かけをしています。

（横田　真）

■編集＝金子・上林・横田　《イラスト》安田

特定非営利活動法人
熊本子どもの本の研究会　発行
〒861－8029
熊本市東区西原1丁目15の24
電話　096（382）5090